

<追悼文>『けーし風』の集いをめぐって想起すること

著者	鳥山 淳
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	47
ページ	455-460
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00023271

『けーし風』の集いをめぐって想起すること

鳥山 淳

多数の著作の中で新崎先生の文章に触れていた私が、直接その言葉を聞く機会を持つようになったのは、季刊誌『けーし風』が毎号の発刊後に開催していた「読者の集い・那覇」であった。一九九七年の春から沖縄に住み始めた私が始めてそれに参加したのは、同年の四月下旬である。

「読者の集い」とは言うものの、様々な催しが集中する土曜午後に足を運ぶ読者はあまりいなかったように、編集関係者が多数を占める場の中で私はしだいに常連の一人になっていったような気がする。当時の誌面を開いてみると、私が始めて「読者の集い・那覇」の報告文を執筆したのは九八年一二月発刊の二一号で、二七号（二〇〇〇年六月）から三三号（二〇〇一年九月）にかけては六回続けて執筆しているので、他に執筆を頼めそうな常連の参加者がいなかったのではないかと推測される。それは集いの趣旨からするとさびしい状態だったのだが、私自身にとっては、新崎先生・岡本恵徳先生をはじめとして、それまで文章の世界でしか接したことがなかった方々と実際に対面し、少人数の席でそれぞれの言葉の雰囲気を感じて定期的に持つことができたのは、大変幸せなこと

とであった。いまから振り返ってみても、一つのテーブルを囲んで各自が自由に言葉を発することができる「読者の集い」は、シンポジウムや講演会などとは異なる性質をもった思考の空間であり、そこで交わされる言葉を聴きながら考えたことの蓄積は、その後の私にとってかけがえのない財産となった。

雑誌の企画・編集は、本来は四名の編集代表を中心に進めることになっていたが、私が「読者の集い」に参加するようになった頃には新崎先生と岡本先生の二名でその役割を担わなければならない状態になっていたらしく、二九号（二〇〇〇年十二月）の編集後記では、編集代表制を廃止して三二号まで「暫定的」に「発行人新崎盛暉、編集人岡本恵徳という形式をとる」ことが告知されている⁽¹⁾。そしてこの告知から間もない時期に、屋嘉比収氏と私を呼び出した両先生は、誰も編集を引き継がないのであればこの雑誌を閉じようと思っている、という趣旨の話を切り出して、私たちを困惑させた。継続的に企画・編集を担っていく「同志」を探し出すことは容易ではなく、屋嘉比氏は相当な不安を抱えて躊躇しているようだったが、経験値の低さゆえに怖いもの知らずだった私は、雑誌がなくなるのを傍観するくらいなら挑戦したほうがよいという程度の考えで前向きな気持ちになっていた。そして以前から平和ガイドなどで活躍していた宇根悦子氏を加えた三名で編集体制を引き継ぎ、また発刊時の校正作業を秋山勝氏と新崎恵子氏が引き続き支えてくださったことによって、三三号（二〇〇一年十二月）から新メンバーによる発刊をスタートさせることができた。

私が「読者の集い・那覇」に参加するようになった九七年から編集運営委員を引き継いだ二〇〇一年にかけては、沖縄現代史の記述から外すことのできない重要な出来事が立て続けに起こった激動期であった。九七年末の名護市民投票、九八年の名護市長選挙と県知事選挙、九九年の県知事・市長による海上基地建設受け入れ表明、二〇〇〇年の沖縄サミット、二〇〇一年の9・11事件と沖縄観光の大量キャンセルなどである。そのような状況に対する新崎先生の向き合い方を感じることができ「読者の集い・那覇」は、私自身の視点を模索するうえで重要な鍛錬の場となった。少し補足するならば、その時期の『けーし風』には名護市在住の興石正氏と浦島悦子氏が継続的に参加しており、名護の人びとがいかなる意味での選択に直面しているのかを知るうえで、そしてそれに対する新崎先生の見解を知るうえで、深みのある議論の空間が存在していた。そのような機会を通して新崎先生の精緻な状況分析から学ぶことは多かったが、私にとってそれよりも大きかったのは、眼前の状況を捉えるための足場、状況に対峙する際の姿勢といったようなものを多少なりとも感じられたことであった。

しかし残念ながら、そこで感じたことをいま私自身の言葉で表現することができずにいる。その後の自分の思考の端々において新崎先生から感じとったものが作用していたことは間違いないのだが、それを的確に表現することは到底できそうにない。ただ、その手がかりを探して新崎先生の当時の論考に目を向けてみたときに、「三〇年前の出来事」と題する次の文章から受けた強い印象は、私の思考

に作用してきた何ものかにつながっていると感じる。そこにおいて新崎先生は、B52撤去を求めた一九六九年の「二・四ゼネスト」が実施直前で「崩れた」ことの歴史の意味を振り返りながら、次のように述べている。

ゼネストが行われていたら、どうだったろうか。少なくとも、多少の基地の整理・縮小、あるいは、基地運用の規制ぐらいは可能だっただろう。ましてや、沖縄基地にしろ寄せて、全国の米軍基地を整理・縮小することなどは不可能だった。その意味でいえば、復帰の際に解決できていた問題が、現在まで持ち越されてしまっているのである。沖縄民衆には、問題を解決する力があつたにもかかわらず。(中略) わたしたちは、歴史から学ばなければならない。この苦難に満ちた沖縄自身の歴史から。^②

名護市民投票の直前に、新崎先生が「二・四ゼネスト」の挫折を起点とする三十年に向き合おうとしていたことは、非常に印象的である。そこにおいて最大の力点は、「問題を解決する力があつたにもかかわらず」という一文に置かれているのだろう。「力があつた」にもかかわらず、その「力」を自覚的に捉え切れていなかったがゆえにゼネストが挫折し、その結果として問題が継続してしまったという歴史認識は、おそらく「同時代史」としての沖縄戦後史を書き続けてきた新崎先生の背骨を成

している。それは当時の日米政府の認識と思考に迫る分析的な言葉によって語られる歴史認識であると同時に、新崎先生が自ら述べているように、「二・四ゼネスト挫折の敗北感」から生じた「激しい脱力感、無力感」、「ある種のノイローゼ状態」⁽³⁾を乗り越えようとする中で手繰り寄せた歴史認識でもあるだろう。

新崎先生がくぐってきた体験によってその歴史認識の正しさが担保されているなどと言いたいわけではないし、私がその一部を引き継いでいるということでもない。新崎先生がゼネスト挫折から三十年という視点で九七年の名護市民投票を見ていたことは、眼前の状況へと連なる歴史を記述するための背骨について考えるうえで素通りできない問いかけを残しているように、私には思える。その歴史認識がどれだけの説得力を持つかという議論はもちろん必要なのだが、それでは片づけられない問いかけを意識しながら新崎先生の「同時代史」を読むことが、言葉の本来の意味での批判的な考察へとつながっていくように思える。たとえば新崎先生がなにを記述し、なにを記述してこなかったのかという問題においても、俯瞰的な視野を設定したうえでその「偏り」を指摘するだけでは、本当の意味で批判的な検討を加えたことにはならないだろう。歴史を記述する自分自身の背骨が同時に問われるような議論の設定がなければ、新崎先生が描いてきた沖縄戦後史像に対峙しうるだけの視座を見出していくことはできないように感じている。

ちなみに私自身について振り返ってみるならば、先に述べた九七年からの数年間は、それ以前に自

分の中で組み立てられていた「沖縄問題」や「基地問題」の図式が眼前の状況に対してまったく通用しないことを痛感させられた時期であった。そのようなときに「読者の集い・那覇」で交わされる言葉とともに思考する時間があつたこと、さらに編集する立場で自身の視点が問われる期間があつたことは、その後の私の思考や姿勢に多大な影響を与えているはずなのだが、それは自覚的に言語化されないまま放置されている。それに言葉を与え、あらためて自身の記述の背骨を問い直すために、新崎先生の存在は欠かせないものである。

【注】

- (1) 「けーし風」第二九号（新沖縄フォーラム刊行会議、二〇〇〇年十二月）七四頁。
- (2) 新崎盛暉『沖縄同時代史第八巻 政治を民衆の手に』（凱風社、一九九九年）一九〇頁。初出は『琉球新報』一九九七年十二月一九日。
- (3) 新崎盛暉『私の沖縄現代史』（岩波書店、二〇一七年）二二五頁。